

ありのままの自分で勝負し 何ごとも楽しむ姿を見せる

今回は「ありのままの自分で勝負できる小規模校こそ、自分を生かせる場所」と
広島県の北エリアに根をおろした小澤圭介先生を紹介します。

小澤先生が「自分らしさ」を教えてもらったのは初任校の広島県立高宮高校だった。全生徒70人あまりの小規模校で、新人ながら5分掌を担当。なんでも自分でやる環境で鍛えられた。「それまでの自分は、こうあるべき、という体裁を言い訳にしているところがありました。でもある先生に『あなたは自分が思うほど良くも悪くもない』と言われてハッとしました。うぬぼれや謙遜を捨て、ありのままの自分を受け入れるということかな。と。以来、肩の力が抜け、自分ができることをしようという気持ちになりました。

演劇、バンド、実況中継… 自分が楽しめるアイデアを出す

「叱るのは苦手。毅然とした指導力のある先生にはなれない」と笑う小澤先生。なんでも面白くなって楽しんでもアイデアと実行力で、周囲を巻き込む先生だ。

文化祭では教員による演劇の発起人として脚本・監督を務め、教員バンドのボーカルとして熱唱。体育祭では騎馬戦の実況中継で盛り上げ、LHRでは焼き芋大会…。

次々とアイデアを繰り出し、周囲を楽しませる。「生徒のため、地域のため、というよりは、すべて自分のためだと思っています。その結果として自分を必要としてくれる人がいることに感謝しています」。

進路を考える時間も 「経団連会長」としてムード作り

小澤先生の「面白がり」は、企画・運営を担当する「総合的な学習の時間」でも発揮されている。1学年で職業研究を行った際は、職業観を育てる第一歩として「自分で考え、動く」という自覚をもたせるために一工夫。グループごとに会社名を決め、社長、経理、広報、渉外などの役職をつけた。自身も「おれは経団連の会長だ!」と称し、会社組織で動いているような雰囲気を作った。

「眉間にしわを寄せて進路を悩むのはおかしい。もっとのびのびと決めてほしいと思っていました。今回の取り組みでそんな雰囲気が生まれつつあります」。今後も唯一無二の存在として、学校を笑いで満たす先生でありたい、と思っている。



広島県立庄原格致高校
小澤圭介先生 (39歳)

香川県立高松高校出身広島大学理学部数学科卒。初任校の県立高宮高校(現在廃校)で県北地域の小規模校に魅力を感じ、以来三次高校を経て2007年より現任校と一貫して県北エリアで勤務。現在2学年の担任と総合学習担当。サッカー部・軽音楽同好会顧問。



小澤先生が新人時代から続けている「保護者日誌」。保護者がわが子についてコメントし、先生が返事を書いたうえで次の保護者に回す。先生の熱いコメントが1ページを超えることもしばしば。その熱意が伝わるのか、日誌は1年間に何回も巡回し、保護者との連携や信頼関係が深まる。

fan message



ひとことといえば「何でもできる熱血教師」。学校行事で先頭に立ち盛り上げる姿は、まるで生徒の模範となって楽しみ方を教えているよう。常にアイデアを繰り出すので次は何かと期待します。学級通信や保護者日誌をコツコツ続ける一面もあります。(2学年主任・錦織恵子先生より)